

いのちいっぱい 感動いっぱい ~ ありがとうの旅を続けよう! ~

穏やかな春が来ました。校庭の桜も、咲く時を今か今かと待ちわびています。すべての生きとしけるものの芽吹きの時です。

行ってきます

校長室前を元気に通っていく1・2年生たち。体育館で行う体育の時間には、必ず教室前から整列して無言で体育館へと向かいます。すべてのことが一生懸命で、言葉にならないかわいさがあります。私は、先生方が無言で移動することを伝えていることは知っていますが、目の前を通る子どもたちをだまって見過ごすようで、自ずと声が出てしまいます。

「行ってらっしゃい！」

子どもたちは、どうしようかと思いつつ、あいさつをしてくれます。

「行ってきます」

これを繰り返して数年。子どもたちは、今は、校長室と職員室に向かって、大きな声で叫んでくれます。

「行ってきまーす！」

「ただいまー！！」

決しておしゃべりするわけではありません。先生方からの指示をきちんと守り、「すべき時にする」あいさつが身に付いています。習慣が人をつくる瞬間です。

今、あなたに考えてほしいこと

コロナ禍にあって、学校教育も大きく変化してきました。特に、ICTの世界は、大きく進歩しました。先日、本校に来ているICT支援員の方と、帰り際にこんな会話をしました。

「校長先生、一つ教えてください。子どもたちが書く“あゆみ”というもの（計画表と日記）があると思うんですけど、これを紙媒体ではなく、タブレットでという話があるんです。紙媒体では、計画表を書かない子もいるし、それを防ぐために、計画表を書かなくていいように画面上で貼り付けるようにすればいいんじゃないかと考えている先生がおられます。紙媒体なら朱書きをして子どもたちとやりとりすることができると思うんですが、それも、デジタルで、と…」

意見を求められた私は、「私は昭和生まれだから、考え方が古いかもしれないけれど」と前置きをして、こんな回答をしました。

「“あゆみ”は、先生と子どもの人間関係づくりのための大切な物（媒体）だと思います。だから、計画表を書かない子どもがいたら、書かない理由は何なのか、書けない理由が何かあるんじゃないかと子どもたちのことを考えることができます。それを確認するために、心配な子どもたちとの教育相談をしたり、保護者と連絡を取ったりして、子どもたちについての理解がまた一つ深まります。それから、私は、子どもたちへの返事をずっと朱書きで書いてきたんだけど、文字を見た子どもたちの状態が分かるし、子どもたちも、先生が一生懸命返事を書いてくれていることに、何かを感じるんじゃないかなと思うんです。便利さだけを追求したら、それは、ICTにはかなわないけれど、教育って、人と人が向き合っただけで、大切なものがたくさん見えてくると思うんですよ。まあ、古い考えなのかもしれないけど…」

私の回答を聞いて、彼女は嬉しそうにこう言いました。

「ありがとうございます。そうですね。すべてがICTではないですよ。聞いてよかったです。」

私は、その言葉を聞いて、こう付け足しました。

「ICT支援員って、ICTを勧めるだけの仕事ではなくて、これはICTに頼らないほうがいいかもしれないねと、課題を投げかけることも、大切なお仕事の一つかもしれないね。」

すっきりした表情で校長室から出ていく彼女を見ながら、6年生の国語の教科書にある「今、あなたに考えてほしいこと」という題材を思い出しました。

(前略)ところで、私たちの祖先が二本の足で歩くようになった理由について、おもしろいことが分かっています。人間は、夫婦と子どもで家族をつくっていました。しかも人間が暮らしていたのは、あまり食べ物豊富でなかったところから、はなれたところから食べ物を運ばなければならませんでした。そこで、食べ物を手に持って運ぶために、立ち上がったというのです。人間の歩き方の始まりに、見つけた食べ物を自分だけで食わず、家族に持って帰るといったやさしい心があったらいいと考えると、うれしくなりますね。

家に残っている家族が、おなかをすかせて食べ物がほしいと思っているだろうと考えるのは、他の人の心を理解することです。生まれたばかりの赤ちゃんは、この能力はありません。でも、赤ちゃんも、家族や周りの人との間でやり取りをしているうちに、だんだん相手の心が分かるようになり、それが全ての人を思いやる気持ちに広がるのです。あなたはもう、この心を持っているのではないのでしょうか。(中略)この思いやる気持ちから生まれたのが、想像力です。これは、他の生き物は持っていない、私たち人間だけにあるものです。遠く離れたアフリカにも、あなたと同じ子どもたちが暮らしていることを想像してみてください。

その子どもたちが食べ物に困っていると知ったら、手助けしたいと思いませんか。このような想像力で、人間だけでなく全ての生き物が上手に生きるにはどうしたらよいただろうと考えることができるはず。これから生まれてくる人や、生き物たちのことも考えられるはず。こうして想像力を働かせて、これからのことを考えていくと、みなが生きて暮らせる社会を考えることもできるでしょう。そして、そのような未来にするには、技術をどのように使ったらよいただろうというところまで思いを広げることができると思うのです。未来のことまで考えて生き方を探していくのが、今、求められている生き方なのではないでしょうか。
(後略)

ICT支援員さんが私に尋ねたこと。それは、このお話のように、「思いやりは想像力」の部分だったのかもしれないと感じたのです。

輝け 花着け 燃えよ 6年

“ふるさととは 遠きにありて思うもの”

あまりにも有名な詩人、室生犀星（むろう さいせい）の“小景異情（しょうけいいじょう）”の一節です。実は、この“小景異情”という詩は、六篇からできていますが、その六篇目にこんな詩があります。

“ あんずよ 花着け
地ぞ早やに輝け
あんずよ 花着け
あんずよ 燃えよ “ ※ 花着け=花を咲かせよ

昨年4月、6年生の教室には、こんな学級目標が掲げられました。

「輝け 花着け 燃えよ6年」



私は、室生犀星のこの小景異情という詩を知りませんでしたので、学級目標の意味がよくわからず、学級担任の菊池之成先生に、その意味を尋ねたことを覚えています。子どもたちが学習した国語の教科書から引用した学級目標ということをお願い、国語の教科書を開いて見た記憶があります。ただ、「花着け」などという言葉は、あまりふだん聞き慣れない言葉で、ピンとこなかったことを覚えています。

ところが、この詩が室生犀星の詩で、六篇からなる詩の一部であることや、その一篇目が、あの有名な“ふるさととは遠きにありて思うもの”という一節だということを知って、自分の無知を実感したのです。

室生犀星は、恵まれない生育歴を持っていて、生まれ故郷を決して“いいふるさと”とは捉えていませんでした。この詩は、東京に出た後、生まれ故郷の金沢に戻った時に書いたものだと言われていますが、この六篇の詩を書き綴った犀星の心の中には、“ふるさと”への複雑な思いがあったと言われていました。だから、“ふるさととは 遠きにありて思うもの”の言葉に続いて、こんな言葉が書かれています。“そして 悲しく うたうもの”。ただ、この六篇の詩を読み進めていくうちに、私は詩の中に“希望や未来”を感じたのです。最後の六篇目にある“花を咲かせよ！輝け！燃えよ！”というこれらの言葉は、苦しい時を越えて、人は強くなるという、まるで自分自身を励ましているかのような感情が入り込んでいます。この小景異情の中には、犀星の複雑な心情に加え、ふつふつと燃え盛る“これから”が見えます。

この1年間、6年生が掲げた学級目標“輝け 花着け 燃えよ 6年”は、まるで、犀星の心の内を表現するような目標だったように思います。そんなことを想像しながら、苦しくつらい時間を共有し、そして、輝き、花着き、燃えた6年生に、心からの拍手を送りたいと思います。6年生、ありがとう。そして、君たちのこれからの祈ります。

〔転出児童の紹介〕

132名でスタートした令和5年度の喜須来小学校でしたが、2学期末で1年生の菊池姫那さんが、そして、この度3月末で、2年生井上奏我さんと西岡寛太くんが、転出することになりました。とても元気で明るい二人のこれからの心から願い、幸多からんことを祈ります。ご家族の皆様も今まで本当にお世話になりました。

3年間、本当にお世話になりました。

3年前の春に着任させていただいて以来、保護者、地域、関係機関の皆様には、本当にお世話になりました。コロナ禍の波に巻き込まれつつも、子どもたちにとって大切な教育環境や教育活動を、皆様と共に手をとり合って、考え創り上げることができましたこと、心から感謝申し上げます。この3年間で、「一番嬉しかったことは」という質問に答えるとすれば、子どもたちのすばらしい成長を見守ることができたこと、そして、保護者や地域の皆様と出会い、悩みや不安について共に考え、子どもたちの未来を語り合えたことだと思えます。

そんな皆様に、本来ならば、お一人お一人にお会いし、お礼を述べなければならぬところではありますが、それができないそうもありません。大変失礼な方法ではありますが、この「校長室だより」最終号をもって、私からの感謝の意に代えさせていただきたいと思えます。皆様、3年間本当にお世話になりました。そして、ありがとうございました。